

それでは今日のテーマは「**洗礼式**」であります。「**バプテスマ**」とも言います。一般的にバプテスマという言葉よりも洗礼という言葉の方が通っていると思います。これはキリスト教用語でありながらも、日本語の中にも使われて、いろいろな意味、また誤解もされているところもあると思います。例えば「洗礼」という言葉を国語辞典で引きますと、これは『大辞林』というものから紹介させて頂きたいと思いますが、全部で3つの用法・用例というものがあるとお伝えしておきたいと思います。

1 つは『 sacrament のバプテスマ・洗礼式』という。(sacrament というのは皆さんも知っての通り、それは「**聖礼典**」と呼ばれるものです。カトリックでは「**秘跡**」と言うもので、カトリックとプロテスタントの捉え方はまったく違いますので、この違いは今ここで詳しくは述べません。ただカトリックの sacrament・秘跡というのは、それをもって救われる。つまり洗礼を受けなければ救われないという救いの手段となっていますから、これは聖書的ではありませんので、プロテスタントでは避けます。プロテスタントの sacrament、それを「**秘跡**」とは呼ばずに、「**聖礼典**」と呼んだりします。これはイエス・キリストが定められた儀式という意味で「**聖礼典**」と言います。その「**sacrament の洗礼**」というふうに『大辞林』にはあります。その後がちょっと問題なんです。)キリスト教入信の儀式(というふうに、これをしなければ入信出来ないかのような印象であります。それはカトリックの sacrament という意味合いを組んでのものかと思います。その後に)浸水(体を水に浸す。と説明があります。)^{しんすい}または灌水(頭部に水を注ぐ。^{かんすい}もう一つは)滴礼(頭部に水で水滴をつける)によって新しい信仰生活に生きることを象徴する。』この部分の説明はあながち間違いではありません。で、それを「**バプテスマ**」とも呼ぶ、というふうに『大辞林』にはあります。

2 番目の説明として、用例として『ある分野や社会に入るために経験しなければならないこと。』これはよく日本語で使います。例えば「プロの洗礼を浴びる」とか。

3 番目の用例は『初めての大きな、また特異な経験』事例としては「砲火の洗礼を受ける」という言い方もあります。

この「**洗礼**」という言葉は英語の“baptism”という言葉の訳語として 19 世紀の前半に中国に渡った宣教師たちが翻訳した言葉です。ですから漢葉聖書にこの「**洗礼**」という言葉が充てられたのであります。それをそのまま日本語でもキリスト教用語として使うようになったわけです。どうしても漢字の「洗う礼・儀礼」というニュアンスからしますと、何かそれによって洗い清められて、晴れてキリスト教信者になるかのような印象をもたらす表現ですから、この「**バプテスマ**」、或いは“baptism”に対しての訳語として「**洗礼**」というのは、誤解を生みやすいものだといろいろ指摘もされているところでもあります。ただ、皆さんはその意味というのはお分かりだと思うので、「**洗礼**」という言葉を使っても必ずしもそのような誤解を持って受け止める事はないと思います。でも、一応「**洗礼**」若しくは「**バプテスマ**」について聖書からその意味というものをちゃんと説明して、そして確認をして頂きたいと思いますので、これよりいくつかの聖書を皆さんに聞きながら説明していきたいと思います。今お話しした『大辞林』の説明は、一般的な認識というものであって、クリスチャンは聖書から**洗礼**について、あるいは**バプテスマ**について正しい認識を持つものであります。

まず**洗礼**というものは、**バプテスマ**というものは、キリストによって制定されたものだということです。人が制定したものではありません。教会組織が制定したものではありません。イエス・キリストが制定されたもの、それを「**sacrament**」と呼んだり、「**聖礼典**」と言うわけです。聖書の箇所を 1 か所皆さんに聞いて頂きたいと思います。**マタイの福音書 28:18~20** であります。有名な大宣教命令というところです。『¹⁸ イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。¹⁹ それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、²⁰ また、わたしがあなた

がたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』この大宣教命令の中に「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受けなさい。」という命令が含まれています。三位一体の神の名前です。この“御名”という言葉は単数形です。父、子、聖霊。神様が3人いるようですから、この名前も複数形になって然るべきだと、文法的にはそう考えるんですが、でも原文ではこの“御名”名前というところは単数形ですから、3人の神のようで実はお一人である。3人という言い方は語弊がありますけれども、三位。3つの位格が一人である。一体ということです。

で、これはイエス・キリストが命じられたということです。誰に命じたかという、キリストの弟子に対してです。で、キリストの弟子とは誰のことでしょうか。イエス・キリストを信じる者全てです。つまりここにいる皆さん全員ということになります。「バプテスマを受けるのは牧師の権威じゃないですか。牧師の専売特許じゃないでしょうか。」と思うかもしれませんが、そんなことは聖書には一つも書いてありません。キリストの弟子であれば、この大宣教命令を受けているわけです。で、これを私たちも行う者であります。そこにもいろいろな教団教派の伝統的な解釈と、あるいは規約というものがございますので、議論的になりますからここでは「聖書にはそう書いてある。」というところで留めておきたいと思います。

で、これを勿論弟子たちは文字通り実行したのであります。使徒の働き 2:38。『そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。』これはペテロの最初の説教です。これによって 3,000 人もの人たちがキリストの弟子として最初の教会、エルサレム教会に加えられたという繋がりになりますが、ここでは「イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」大宣教命令のところでは、「イエスは父と子と聖霊の名前によって受けなさい」と。ここでは「イエス・キリストの名によって」と。違いがありますけれども、でも実際にはそれほど大きな違いはありません。ここにこだわる人もありますけれども、三位一体を否定してイエス・キリストだけがただ 1 人の神であると、そういう話ではありません。イエス・キリストは三位一体の第二位格ですから、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けることも、これは三位一体の神の名によってバプテスマを受けることと、変わらないわけです。等しいことです。ただちょうどここでは、イエスが子なる神であるという認識が薄い人たち、父なる神は主であってヤーウェであって唯一の神であるという認識は広く知られていましたけれども、特にユダヤ人の間にあっては「ナザレのイエスが神である。生ける神の子キリストである。」と言う認識は希薄だったわけです。ですから敢えて強調してイエス・キリストは三位一体の神の第二位格である、子なる神でもあるということです。ですから、イエスの名によってバプテスマを受けるという事は、神の名によってバプテスマを受けることに等しいということを敢えて強調していますので、違いは無いということを覚えて頂きたいと思います。

で、もう一つ、バプテスマがなぜ sacrament なのか。秘跡で、イエス・キリストが制定されて守り行うべきことかと言いますと、イエス・キリストもバプテスマを受けられているからであります。ですからクリスチャンがバプテスマを受ける、洗礼を受けるということは、イエスが命令されたということと、もう一つはイエス・キリストもバプテスマを受けられた、受洗されたということ。キリストの模範があるからです。キリストの弟子は、キリストに倣う者です。キリストのように生きる者ですから、キリストがそうされたのであれば私たちもそうすべきだということです。で、そのイエス・キリストがバプテスマを受けられたというその記事、これは 4 福音書すべてに記録されております。つまりそれほど重要な出来事であるということです。4 つの福音書すべてに記録されていることというのは、相当重要だということを毎回意識して下さい。最重要事項であると言っても過言ではありません。それは**マタイの福音書 3 章、マルコの福音書 1 章、ルカの福音書 3 章、ヨハネの福音書 1 章**にそれぞれ記録されていますから、後ほど確認してみてください。

この 2 つの点です。これはイエス・キリストによって制定されたものだから。そしてこれはイエス・キリストが模範を示されたものだから。だからすべてイエス・キリストを信じるクリスチャンと呼ばれる者は、必ずバプテスマを受けなければならない。洗礼を受けるべきであるということです。

イエス・キリストを信じていながら「私は洗礼は受けません。バプテスマは受けません。」と言うのはありえないということをもまず覚えて頂きたいと思います。ただし、誤解のないようにして頂きたいのは、これを受けることによって救われるのではないということです。洗礼というものは、バプテスマというものは、救いの手段ではない。ここは明確にしておきたいと思います。クリスチャンであれば自然にバプテスマは受けるものだということです。受けないのは不自然だということです。

次にバプテスマの、洗礼の聖書的な意味についてお話していききたいと思います。その際のテキストはローマ 6: 1～14 になります。『¹ それでは、どうということになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。² 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。』

で、3～5 節のところはバプテスマの象徴としての意味がまとめられています。『³ それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。⁴ 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。⁵ もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活と同じようになるからです。』これが象徴としての意味です。ポイントだけお伝えしますと、私たちはイエス・キリストを信じたその信仰によって罪の中から救われてキリストに繋がれた、というその霊的事実をこのバプテスマは象徴しています。キリストと一体であること。古い自分が、罪の性質を抱えた自分がイエス・キリストと共に死んで、そして新しい命にキリストとともによみがえったことを象徴するセレモニーです。頭の中でビジュアル的にイメージしてみてください。水の中に沈められることが死ぬということです、葬られるということです。ですからここでの水は墓を意味するわけです。でもその墓の中から、水の中から引き上げられてきます。それがよみがえるという霊的事実の象徴です。で、クリスチャンとして神に従い、神とともに生きる新しい人生を出発したことを象徴します。4 節の終わりに『**私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。**』“新しい歩みをする”これから始めていくという、これはゴールではないということです。歩みのスタートですから勘違いしてはいけません。洗礼によって救われるのではないということは先ほどから強調してお伝えしています。洗礼を受けてクリスチャンになるのでもありません。信仰によって救われたから洗礼を受けるのであります。信仰によってクリスチャンになったから洗礼を受けるんです。洗礼は信仰生活のゴールではありません。あくまでスタートです。

よく誤解されているのは「私は聖書をしっかり学んでから。罪の生活から足を洗ってから。^{ふさわ}相応しい者となってから、それから洗礼を受けます。」これは完全に洗礼というものを誤解した物言いです。ゴールという感覚を持っているわけです。でも洗礼はゴールじゃないんです。スタートなんです。絶対にこれを履き違えてはいけません。ですから、いつまでも洗礼を受けない人はスタート地点に立ってないのであります。

次にこのローマの 6 章からのテキストを用いながら 6～10 節のところ、それは告白としての意味でもあるということ。バプテスマの意味として今度は、告白としての意味です。『⁶ 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。⁷ 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。⁸ もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。⁹ キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。¹⁰ なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。』この部分が告白としての意味であります。救いというものは、信じる者の内側に起こる霊的な出来事です。当然目に見えない出来事です。でも、そのバプテスマというものは、洗礼式というものは、それを公に告白することでもあります。自分が救われたとい

う霊的な事柄は人に見えないので黙っていれば分からないわけです。でも、それをバプテスマ、洗礼式という形で公に人々の前に明らかにすることによって認めてもらえるわけです、認識してもらえるわけです。これが、イエス・キリストが私たちにも「洗礼を受けなさい。バプテスマを受けなさい。」というふうに命じた理由の大きな 1 つとも言えます。

ですからバプテスマ、洗礼式というのを単なる象徴に過ぎないとして軽視したり無視したりするというのは、これは間違った姿勢です。むしろキリスト教会の歴史の中で私たちの先人たちは、命がけでバプテスマを受けてきたのであります。そして命がけでバプテスマを受けてきたのであります。ある場合では、洗礼を受ける・受けるということは、死を意味したわけです。それでも続けてきたわけです。単なる儀式・象徴という軽いものではないことは、キリスト教の歴史を見ても分かると思います。命がけでイエス・キリストを自分の救い主として、主として告白すること、それがバプテスマの意味でありますから、そう信じたものはそうしたわけです。一般的にはキリスト教会においては、洗礼を受けていることが名実ともにクリスチャンであることの印として受け取られています。これはですからノンクリスチャンの世界から見ても、洗礼を受けていないクリスチャンというのはまだ正式なクリスチャンとはなかなか見てもらえないわけです。でも「洗礼を受けました。バプテスマを受けました。」ということになって、一般的にも「あ、この人は本当にクリスチャンになったんだな。」と認識されるというものであります。告白としての意味があるということです。

3 番目の意味、それは証^{あかし}としての意味です。6 章 11～14 のところを続けて読んでいきたいと思います。『¹¹このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。¹²ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。¹³また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。¹⁴ 』というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの中にあるからです。』バプテスマは、洗礼は、私たちが罪から救われて永遠の命を持つ者になったということを公にするだけではありません。さらに救われた私たちが、これからどのように生きる者であるかを証するものであるということです。先にも述べたように、洗礼はゴールではなくてスタートです。新しい歩みを、新しい命を持って始めていくわけです。その新しい歩みというのは、古い歩みとは全く違うものです。

古い歩み、古い生き方というのは、自分が中心です。自分が神です。自分の好きなように、やりたいように生きていくのが古い生き方。で、新しい生き方は、イエスを主とする生き方ですから、イエスに従っていくという生き方。イエスの喜びのために、主人の喜びのために生きるのがしもべであります。神の栄光を表すために生きること。それがキリスト者の生き方。それは一言では献身というふうにも言うわけです。洗礼を受ける者に期待されているのは、神に対する全き献身の生活であるということです。ローマ 12:1～2 を読みます。『¹そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。²この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。』神の御心に従って生きるわけです。今までは自分の心に従ってきたわけです。自分の意思ではなくて、神の意志に従っていく、生きていく。それが新しい歩みです。

宗教改革者のマルティン・ルターは、洗礼についてこのように定義しました。『洗礼は私たちの中の古いアダムが日々の悲しみと悔い改めとによって責められ、すべての罪と悪い欲望とともに滅ぼされるものであること。そして新しい人間が日々生まれ出て立ち上がり、永遠に義と純潔の中で神の前で生きるものであることを意味する。』その言葉が今まで述べてきたことをある程度要約しているかと思います。

そして、今からさらにこのバプテスマの意味について深めていきたいと思うのですが、以前にも皆さんに紹介した

ことのある『バプテスマに備えて』という本、これは横山武という牧師が書いた本で、ブログにも今解説してきた内容もこの本とともに記していますので、まだ読んでいない方は検索して読んで頂きたいと思いますが、この横山武さんの書いた『バプテスマに備えて』という小冊子にあたるといえますけれども、非常に分かりやすくバプテスマについて説明しています。特に日本におけるその求道者の人たち、バプテスマに関していろいろ疑問を持ったり、また誤解を抱くので、そうしたものをふまえて解説しております。例えば 1 章には「バプテスマの準備」という項目がありまして、「住民登録の印でもあるかのように、バプテスマを受ける」とか「まじめに努力している人々にまれに見られる態度ですが、まず自分の力で過去のそれらの問題(悪習慣)を解決し、きれいになってからイエスを信じ、バプテスマを受け」という誤解を挙げながら解説しているというものであります。

使徒の働き 2 章 41～42 節。このテキストを横山武さんは用いながら解説を始めていきます。先ほども**使徒の働き 2 章**を開いて、ペテロの説教によって 3,000 人もの人が救われて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けたというところを見ました。『⁴¹ そこで、彼のことばを(ペテロのことばを)受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。⁴² そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。』ここから、まずバプテスマを受ける資格について述べます。引用しながら読んでいきますので耳で聞いて下さい。

『世の中には、だれでも好きな人がやっつかまわないことと、ある特定の人でなければしてはいけないこととがあります。たとえば、サイクリングをすることは、自転車に乗れる人ならば、だれがそれをしてかまいません。しかし、自動車や電車や飛行機を操縦するとなると、そうはいきません。いくら、飛行機を操縦して大空をかけ巡りたいと思っても、一定の資格がなければ、そうすることは出来ないのです。飛行機を操縦しようと思うならば、そうできるための、定められた資格を身につける以外にはないのです。(その通りです。)バプテスマについても、それと類似したことが言えます。バプテスマは、ただ単に、それを受けたいと思う者が、だれでも受けられるものではありません。やはり、ある定められた資格を満たしている人々だけが受けられるものです。では、バプテスマを受けるための資格とは、いったいどのようなものでしょうか。』

で、この資格についてもいろいろな誤解があるわけです。で、横山さんの言葉ですと『まことの神に対する信仰をもたない人が大部分であるような職場で働いている者が、バプテスマを受けようとしていることを、周囲の人々に話したりしようものなら(会社で周りに、同僚にそういうことを話そうとするならば)、「君はいつから聖人・君子になったのだい」とか、「君もいよいよ世捨て人になるのかね」などとからかわれたりしかねません。また、未信者の家族も、「そんなものを受けるとお嫁に行けなくなる」とか、「世の中で出世できなくなる」などと、あたかも隠遁生活にでも入ってしまうかのように考えて、反対する場合があります。さらには、バプテスマを受けるご当人でさえも、バプテスマを受けることによって、自分が聖人・君子のようにふるまわなければならないのだと考えてしまい、現実の自分の状態とのギャップを、ひそかに悩んだりすることがあります。他方ではまた、「私はずいぶん長い間教会に通いましたので、そろそろバプテスマを受けさせて頂きたいと思います」などと申し出る人がいたりします。』

で、これらはすべて無知、無理解、不安、誤解といったものですが、その大部分が、バプテスマを受ける資格についての明確な理解が欠けているところから起こってくるものだと言っています。物事を判断するとき、まず、聖書がそれについてなんと言っているかを探するのは、何よりも有益なことです。バプテスマを受ける資格についても、聖書がどのように教えているかというところを皆さんにも注目して頂きたいと思います。

で、先に挙げた**使徒の働き 2 章**の聖句、そこにバプテスマを受ける者の資格について明示されていました。**2 章 41 節**に『そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。』と聖書は言っています。“彼のことば”すなわち使徒ペテロの伝道メッセージの言葉を受け入れた、信じた人々が、バプテスマを受けたということです。順序が大事です。まず、その神の言葉、福音のメッセージを信じた者が、次にバプテスマを受けているということです。この順序です。バプテスマを受ける資格が、罪を悔い改めて主イエス・キリストに対する信仰告白をした者であるということです。バプテスマを受けてから救われるという意味ではありません。例えば**マルコの福音書 16 章 16 節**を開いて頂

きたいと思います。この箇所は誤解もされる箇所なのですが、その誤解も解きつつ順序の大切さを示していきたいと思います。これもマルコ版の大宣教命令の一部です。その前節の **15 節**には『¹⁵ イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。¹⁶ 信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。』これは大宣教命令でもあるわけです。「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。」とイエスは命令されましたが、これを誤解して「バプテスマを受けなければ救われないんだ。」と、こう書いてあるじゃないかと言うんですが、その人は続きをちゃんと見なければいけません。「**信じない者は罪に定められる。**」とハッキリ書いてあります。もし仮に、バプテスマを受けなければ救われないとするならば、ここでは「**信じない者は罪に定められる。**」とするのではなくて「**バプテスマを受けない者は罪に定められます。**」とすべきなんです。誤解されやすい箇所なので、注意して読まなければいけません。イエス・キリストを信じて救われるんです。バプテスマを受けるというのは、信じた結果ということなんですが、どうしてもバプテスマを受けるというのは信じた者が受けるものなので、並行してまるで一緒くたにされて述べられることが多いわけです。それほどバプテスマというのは、普通に信じたら受けるものだという認識があったからです。信じてもバプテスマを受けないということは、あり得ないことだというのが当時の一般認識だったわけです。「**信じない者は罪に定められる。**」であって、「バプテスマを受けない者は罪に定められる。」わけではありません。

他にも**使徒の働き 8 章 12 節**。こちらはハッキリ分かりやすいと思います。初代教会の記録です。『しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。』順序が大事です。ピリポの宣教のメッセージを聞いて信じたんです。ペテロのメッセージを聞いて信じたのと同じです。その「**信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた**」と。バプテスマによって救われるかのように考えるのは、聖書の立場とは異なっております。

さらにもう 1 点分かりやすい例を指摘しておきますと、**ルカの福音書 23 章 43 節**。イエス・キリストが十字架上で彼とともに磔にされた犯罪人の 1 人に対してイエスは「**あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます**」と。もうパラダイス、天国にいますと。洗礼を受けなくてもパラダイスにいるわけです。十字架の上で両手両足釘付けにされているわけですから身動き取れないわけです。で、イエス・キリストも同じ状態ですからイエスが隣の囚人に十字架上からバプテスマを授けるなんていうことは不可能です。洗礼を受けなくてもパラダイスに行けるわけです。天国に行けるわけです。でも、この状況ではとても水のバプテスマを受けられる状況にない事は、もう見て明らかです。十字架から降りる事が出来たら当然バプテスマを受けたはずですけども、それが許されない状況もあるということです。ですが、洗礼を受けなければ救われないという教えは、この記事をもっても完全否定されるわけです。

またバプテスマというのは、長い間教会に出席していたからといって、その報酬として受けるようなものでもないわけです。あるいは教会のために何かをすることによって初めてバプテスマを受ける資格が得られる、「献金したから、奉仕したから、長い間教会に通ったから、それで晴れて洗礼を受けられます。勉強したから晴れて洗礼を受けられます。」というものではないわけです。洗礼を受ける資格についてはもうこれ以上述べる必要はないと思います。洗礼を受ける資格は、聖人君子ではなくて罪人です。罪人こそ洗礼を受けるにふさわしいです。でもその罪人がイエス・キリストの福音のメッセージを聞いて救われるわけです。そしてイエスと一体化して、イエスとともに新しい歩みをするという、その象徴的な意味、告白としての意味、また証としての意味というのを水のバプテスマによって体現しながら信仰生活をスタートしていくのであります。

では、そのバプテスマを受ける時期についてはどうでしょうか。いつ頃バプテスマを受けるべきなのか。タイミングのことです。これについても正しい理解を欠く人たちが多くあります。福音を信じた者がいつバプテスマを受けるべきなのかということなんですが、横山武さんはこういうことを言っています。

『「自分はイエス・キリストの贖いは信じているけれども、まだまだ、バプテスマを受けるにはふさわしくない者です。もう少し努力して、本当にクリスチャンらしくなってからバプテスマを受けたいと思います」というように、バプテスマを

受けないことの言い訳をします。』(そういう人は結構多いです。)しかし、そのような考えは、バプテスマを受けるべき時期について正しい理解ではありません。そのような誤った考えは、バプテスマを、完全に出来上がった、完成したクリスチャンの保証マークのようなものと誤解しているところから生まれてくるようです。確かに、キリストを信じているクリスチャンは、ある意味では完全な者であり、義とみなされている神の子です。クリスチャンはだれでも、キリストにあって神の前に完全に義なる者と認められる立場をもっています。と同時にまた、より完全な状態を追い求めつつ、神の御力によって前進に努める過程も、クリスチャンの姿です。それはちょうど、ある学校に入学した学生は、その時から完全に、その学校の学生には違いないけれども、完全で模範的な学生になるためには、学びと訓練を受けて努力する必要があるのと似ています。このような例にそって考えるならば、バプテスマは、クリスチャンの卒業式ではなくて、入学式であるということが出来ます。「クリスチャンらしくなってからバプテスマを受けよう」との考えは、バプテスマがクリスチャン生活の出発点であるという基本的な事柄の理解に欠けているわけです。むしろ、バプテスマを受けて、クリスチャン生活の新しい出発をすることによって、成長がもたらされるのであり、その結果として、クリスチャンらしい品性が育っていくのです。完全なクリスチャンになってからバプテスマを受けようとすることは、あたかも、スタートを切らないでゴールに至ろうと試みるようなものであって、矛盾した考えと言わなければなりません。このことは、大人になってからクリスチャンになった人々が、しばしば直面する、酒やタバコの問題、仕事上の付き合いや娯楽の問題、また生活上の悪習慣の問題などにまつわる事柄を解決しようとする場合にも、当てはめて考えることができます。それは、過去の生活上の種々の悪癖を解決しようと、まじめに努力している人々にまれに見られる態度ですが、まず自分の力で過去のそれらの問題を解決し、きれいになってからイエスを信じ、バプテスマを受け、名実ともに立派なクリスチャンとしてのスタートを切りたい、と考える態度です。』

そういう考えは、一見、まじめで、謙遜で、好ましい考え方に聞こえるわけです。しかし、ここでの致命的な問題というのは、すべての問題や悪癖というものを、自分の力で完全に解決してからイエスを信じると。これは信仰義認の考えではなくて、行為義認の考え。もうこれは、もはやキリスト教ではなくなってしまうということです。そうではなく、自分の罪の問題、弱さの問題を正直に認めて、それをまずイエス・キリストに告白することから始まるわけです。「私にはもうこのことはどうにも出来ないことです。自分自身を洗い清めることは出来ません。過去の清算なんかとてもじゃないけれども私には出来ません。どんなに頑張っても自分自身を救うことは出来ません。イエス・キリストだけがこの私のすべての罪を赦すことができ、洗い清めることができ、新しく造りかえることが出来ます。そのために私の罪を代わりに十字架で負って、代わりに死んでくださった救い主イエス・キリストを私は信じ受け入れます。」そこからスタートするわけです。で、その後もイエスが救い主ですから救い続けてくれることを信じるわけです。自分で自分を助けていいんです。自分で自分を救わなくていいんです。もうイエス・キリストが一生涯ともにいて自分の弱さも、自分の欠けも、情けないところ、不甲斐ないところ、全部カバーして補って支えて、そして新しく造り変えて、導いて守って下さるわけです。で、結果的には神に喜ばれる、神の栄光を表すことの出来る新しい歩みをする事が可能になるわけです。イエス・キリストによってです。

で、それはいつから始まるかと言ったら、もうイエスを信じたその日から始まるわけです。つまりもうその日にバプテスマを受けていいわけです。バプテスマを受ける時期というのは、イエス・キリストを自分の主として信じ受け入れたその瞬間、その日からもう受けられるわけです。使徒の働き 2 章 41 節を先ほど読んだところです。そこでは何と書いてあったか思い出して下さい。『そこで、彼のことを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。』信じたその日にもうバプテスマを受けたわけです。

で、使徒の働き 8 章 36 節も参照してみてください。エチオピアの宦官が伝道者ピリポを通してイエス・キリストを信じ救われるところです。『道を進んで行くうちに、水のある所に來たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。』』そして新改訳聖書では 36 節の後飛んで 38 節になっていますが、36 節の終わりに＊印がついています。それが 37 節にあたる部分です。欄外には異本として『「そこでピリポは言った。もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。」すると彼は答えて言った。「私は、イエ

ス・キリストが神の御子であると信じます。』で、その後に 38 節『そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。』信じたその日にバプテスマを受けているわけです。

でも、多くの教会では「イエス・キリストを信じました。」と決心してもなかなかバプテスマを受けさせてくれません。まずは数週間、或いは数ヶ月、洗礼準備のための、バプテスマの準備のための学びをしてから。まずは牧師をはじめとした役員会の承認を受けてから。まずはちゃんと救われたかどうか信仰の証しを何ページかに渡って書いて、それを皆の前で読み上げてから。内容によっては受けさせませんよ。内容によっては何度も書き直しをさせられます。それは聖書的ではありません。勿論安易にバプテスマを授けたくないという意図がそこにある事は分かっています。でも、それは聖書的ではないということを皆さんには覚えて頂きたいと思います。

で、横山さんの本には続いてこうあります。『バプテスマについて誤った考えを持つ人々は、次のように言います。「バプテスマが罪の赦しの手段でなく、罪を赦された者の受ける印であるならば、結局は受けても受けなくても同じことではないか。それならば、わざわざ受ける必要はあるまい」と。しかしこのような主張は、最も基本的な点について、バプテスマを受けるということを誤解しているところから生じます。それは、バプテスマを受けるということが、人間側の好みの問題によって決定され得るような事柄ではないという点についての誤解です。クリスチャンがバプテスマを受けるのは、それが習慣だからではありません。また、長い間の教会の伝統であるからでもありません。ましてや、そうしたほうが体裁がいいから受ける、というような理由からバプテスマが行われるのではありません。私たちがバプテスマを受けるべきであるかという理由については、やはり聖書の中に、正しい解答を見出すことができます。』

それが冒頭で私が皆さんに申し上げた 2 点です。それはイエス・キリストが命令された事だからです。マタイ 28 章の大宣教命令。で、それはもう 1 つ、イエス・キリストの模範であったからです。で、その模範を受けてキリストの弟子たちも継承していったわけです。弟子たちも洗礼を受け、洗礼を授けていったというその事実が聖書の中に記録されています。これをもって私たちはバプテスマというものを正しく受け止め、実行していくのであります。

で、横山さんはこう言っています。『信仰生活の根本は、聖書で言っていることが自分の考えと合致するから自分は従っていかう、ということではありません。むしろ、みことばの教えが第一であって、その真理を謙遜に受け入れ、それに従っていくところに、信仰の本質があり、また信仰生活の本当の祝福もあるのです。バプテスマのことを考える場合にも、この根本的な態度が貫かれていなければなりません。(心から「アーメン。」と言いたいと思います。)いたずらに自分の考えに固執し、完全な者になってから受けようしたり、単なる形式にすぎないと考えて無用視したりすることは、みことばがバプテスマについて教えるところではありません。みことばの教えに従った理解と行動こそが、信仰生活の祝福の源なのです。』と。

で、次にバプテスマを受けた人について。もう一度使徒の働き 2 章 41～42 節の御言葉に戻って頂きたいと思います。『⁴¹そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。⁴²そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。』注目して頂きたいのは「弟子に加えられた。」というフレーズです。彼らは罪を悔い改めて、イエス・キリストを信じて、バプテスマを受けて、弟子に加えられたんです。この順番です。別の訳では「弟子に加えられた。」というところは「仲間に加わった。」と訳すものもあります。要するにキリストを信じる者たちの群れのメンバーになった。教会員になったということです。そのところからバプテスマを受けた人々が教会員として受け入れられているということが分かります。教会と言うと、建物を指すと誤解する人がありますが、ただ「教会」という言葉は皆さんもご存じの通りギリシャ語では「エクレシア」と言っていて、それは「召された者たち、呼び出された者たちの群れ」という言葉です。イエス・キリストの十字架の救いの御業を信じて、罪の中から永遠の命へ救い出された人々によって形成される信仰者の共同体。それが教会というところなんです。ですから教会員という立場は、バプテスマを受けた人が資格を得ることなので、別にバプテスマを受け

ないと救われないという意味ではありませんが、キリストの弟子であるならば当然バプテスマを受けるものです。バプテスマをもってキリスト弟子であることが証しされ、弟子であれば教会の中で一端を担って体の一部として、その構成員として、その中で生き、働いていく者となるわけです。

で、次に取り上げたいことは、バプテスマの執行の方式について。バプテスマというのは、「水のバプテスマ」とよく言われますけれども、そのやり方についていろんな方法があるわけです。形式というものです。これは先にも『大辞林』の説明で 3 つほどあったという事は辞書にも載っていることですから、クリスチャンでなくても認識されているということをまず覚えて下さい。「バプテスマというのはそんなにいろいろな方式があるんですか。」なんて非常識な事はクリスチャンの口から出してはいけません。一般の人でも国語辞典を見ればそこに書いてあるわけですから、そのぐらいの知識は持ち合わせなければいけないということです。

で、復習したいと思います、その執行の形態というものは 3 つあると言いました。1 つ目は浸礼というもの。全身を水に浸す。頭のとっぺんから足のつま先まで全身。これを全浸礼とも言います。2 つ目が灌水礼。これは頭に水を注ぐという形態です。3 つ目が滴礼です。水滴を頭にふりかけるといふ、3 種類です。それぞれについて詳しくバプテスマの歴史もそこに加えながら皆さんに解説していきたいと思ひます。

まず浸礼から詳しくお話していきたいと思ひますが、「**浸礼**」という言葉はこれは**バプテスマ**という言葉の訳語のひとつであります。先ほど**バプテスマ**の訳語は 19 世紀の前半に中国に渡った宣教師たちが「洗う礼」と書いて「**洗礼**」と訳した、それがそのまま漢語聖書から日本語の聖書に踏襲されていったという話をしましたけども、でもそれはちょっと不適切な訳語であるということが挙げられまして、**バプテスマ**という言葉は、「洗う礼」ではなくて、むしろ「**浸す礼**」と表記すべきである。というのは、**バプテスマ**という言葉そのものが「**浸す**」という意味の言葉だからです。「**バプティズム**」"baptizo"というギリシャ語です。ですから、「洗う」というイメージはないわけです。「**浸す**」というイメージです。「**洗礼**」とは区別されるべき言葉として、「**浸礼**」というのを敢えて掲げているグループがあるわけです。

で、その根拠としてヨハネの福音書とかマタイの福音書に出てきて、「**キリストはバプテスマを受けられ、水の中から上がられた。そこは水が豊かであったからだ。**」というフレーズが、特にバプテスト教会というところで重んじられまして、「**豊かな水の中でバプテスマを受けた。**」これは水の中にもう全て体が浸されたかたちのバプテスマを受けられたという理解です。ですからバプテスト教会というのは、この浸礼教会とも言うんですが、全浸礼以外の形態・形式は認めないという立場にあります。つまり、滴礼だとか灌水礼というのは、これは認めないという立場です。否定するわけです。それはもうバプテスマではないと言うわけです。バプテスマならば、それは浸礼でなければいけない。全身水に浸さなければ、これは認めないよと。で、それには勿論一定の根拠もあるわけです。

バプテスマの歴史を紐解いていきますと、1 世紀の後半から 2 世紀の初頭に成立した使徒教父文書のひとつで『**ディダケー**』というのがあります。『**ディダケー**』というのは「**教え**」という意味の言葉で、日本語では『**十二使徒の教訓**』というふうにも訳される、初代教会の様子を知る上では重要な文書となっています。で、その『**ディダケー**』の、『**十二使徒の教訓**』の第 7 章にバプテスマ、洗礼について書かれている項目があります。当時の教会の様子を知る上で貴重な資料となっています。そこをちょっと読み上げますと「**洗礼については、次のように洗礼を受けなさい。**（洗礼という訳語を今敢えて使っていますけれども）…**流れる水によって、父と子と聖霊の名をもって洗礼を受けなさい（マタイ28:19）。流れる水がない場合には、他の水で洗礼を受けなさい。冷たい水で出来ない場合には、温かい水でなさい。どちらの水もない場合には、頭に水を三度、父と子と聖霊の名をもって注ぎなさい。洗礼の前には、授洗者、受洗者、また他に誰か可能な人たちがいるならば、（その人たちも共々）断食をなさい。受洗者には、（洗礼に）先立つ一日か二日断食するよう命じなさい。**」1 世紀の後半から 2 世紀の初頭にかけて洗礼を受ける前には断食もしたと。勿論この断食をするということは、聖書には命じられていないことですから、これは彼らの慣習だった

という事は明らかです。で、全浸礼というのが基本だということがこの『ディダケー』からも窺^{うかが}い知れます。滴礼と灌水礼の起こりも、この『ディダケー』では水不足の故にという但し書きがあります。又その他に重い病の床にある者が、死に臨み、自らバプテスマを希望したときには、やむなく代用手段として灌水礼、若しくは滴礼というものが行なわれたというのが事例として『ディダケー』の中に挙げられております。

で、この病を理由とする滴礼ないし灌水礼の最初の歴史的な記述というのは、250 年頃のもので、教会歴史家のエウセビオスという人によってなされております。この人は 263 年頃~339 年に生きた人ですけれども、そのエウセビオスという人の記述では「ノヴァティアヌスは重態であった。そして自ら死が迫っていると考えたので、しきりにバプテスマを受けることを願った。・・・ノヴァティアヌスは衰弱がひどく水に浸ることは不可能であると考えられたので、代用手段を採用することによって、できるだけ水に浸ることに似るようにと病床に横たわる彼の上に水がふんだんに注がれた。この時以来人々が極度の重病や衰弱状態にあつて、病床を離れることの出来ない場合には、灌水礼や滴礼の手段を採用することになり、そこで病床(クリーネー)という言葉に基づいて臨床(クリニック)バプテスマと呼ぶようになった。」このように、水不足や病人の場合に用いられたというのが、そもそもの灌水礼、又は滴礼の起こりだというのが歴史の中に記されています。で、それは 13 世紀に至るまで、全浸礼・浸礼に代わる例外的な処置と考えられていました。これはあくまで例外であると。砂漠とか、水がそんなにふんだんにはないわけです。病人もそんな水に浸ったらそれこそショック死してしまうこともあるかもしれません。いずれにしてもそうした例外ケースを除いては、浸礼というのが一般的だったということです。それが原則だったということです。で、それは 13 世紀に至るまでと言いました。重病人がその床で受けた滴礼、もしくは頭上に水を注ぐ灌水礼、いわゆる「臨床(クリニック)バプテスマ」は、浸礼が適当かつ安全に行なえるようになるまで施すべき臨時的な手段とみなされてきました。ですから回復したら改めて全浸礼を受けるということもあったわけです。とりあえず亡くなってしまうかもしれないからということで、灌水礼とか滴礼が行われたわけです。で、浸礼が行えるようなコンディションになったら、改めて浸礼を授けるということをしていたという事は、2 回授ける場合もあったということです。1 度きりで終わってしまうことも勿論あったわけです。

で、その後バプテスマの様式に関する歴史を辿りますと、13 世紀までは浸礼が一般的だったということなんですが、13 世紀の初めには西ヨーロッパにおいて滴礼が重病人や瀕死の者以外にも、普通の人たち、特に幼児に行なわれることが非常に多くなりました。1280 年のケルン宗教会議において、滴礼は浸礼が厳密に不可能な場合にのみ許されるべきであるという旨の布告がなされるまでになりました。しかし、1311 年にラベンナの宗教会議で滴礼あるいは灌水礼が浸礼と同等の合法性を持つことが認められ、この時以来、浸礼から灌水礼、滴礼への移行が西ヨーロッパでは急速に進んでいきました。で、皆さんは今現在、滴礼式とか灌水礼式というのは、だいたいカトリックでは一般的であるという認識を持っていると思います。でも、カトリックも初期では全浸礼を施していたんです。でも、だんだん 13 世紀以降、例えば十字軍の時代になったら、(全浸礼というのは結構手間もかかるわけです。ですから)十字軍に行く前にとりあえず洗礼を受けて救われてから行きなさいと、慌てて行ったわけです。その際には滴礼とか灌水礼は手っ取り早く出来るので、それがどんどん普及していったわけです。ヨーロッパも水が豊かなところもあれば、水がないところもありますので、そういった便宜的な理由、或いはそういった軍事的・政治的な理由からもいつの間にかカトリックにおいては特に全浸礼ではなくなって、灌水礼・滴礼というものが一般的になっていくわけです。

で、そういった歴史があるということをまえて頂いて、私は個人的にはバプテスマというものは聖書の記述からしますと、イエス・キリストがヨルダン川で全浸礼を受けられたわけです。で、それはイエス・キリストが受けられた方式でありますから、それが望ましいと考えています。で、先ほどもその象徴的な意味もお話した通り、全浸礼でなければなかなかこの象徴的な意味を体現することは出来ません。ただ頭に水を振りかけるぐらいでは、その象徴的な意

味を全身で受け止めることは出来ないとは言いませんけれども、難しいと言った方がいいと思います。というのは、イエス・キリストの死と葬り、復活、そしてイエスとひとつになる。その象徴的な行為を全浸礼であればよく体现できるわけです。でも、灌水礼とか滴礼ではその象徴はくまなく完全な意味では体现出来ないわけです。心でそう思って、そう信じて、灌水礼でも滴礼でも勿論受けられる事は受けられますけれども、折角であるならば、事情が許すならば、折角水が豊かに与えられているところに生きているのであれば、(この日本という水が豊富なところに生きているわけです。)であるならば全浸礼が、所謂浸礼というのがふさわしいと。形式にこだわるつもりは私にはありません。重要なのは形式ではなくて、意味であるという事は言うまでもありません。ですから別に全浸礼を受けているからといって、それが他の様式よりも優れているとか、或いはそれをもって救われるという事ではありません。意味が分からずに受けたら、ただの水浴びです。滴礼だろうと、灌水礼だろうと、全浸礼だろうと、何の関係もありません。ただの水浴びです。ですから病床にある者、身体的に無理がある者、或いは水がたまたまそこにはないというケース。そうした場合、緊急性を要するようなケースであれば、やむを得ない場合として臨機応変を持って灌水礼、或いは滴礼を施すべきだと。これまでも私はそのように行ってきました。もう慌ててコンビニで水のペットボトルを買って、そしてそこで洗礼を授けたこともあります。形式にこだわるあまりにバプテスマを授けないということになりますと、これはイエス・キリストの大宣教命令に反することにもなります。また洗礼を受けた時、受洗時に所属していた教会が滴礼しか行っていなかったのも、浸礼を受けたくても受けられなかったという人もあるわけです。聖書を読んでいて「やっぱり私はイエス・キリストと同じように全浸礼を受けたい。」そういう心残りのある方は、改めて浸礼を受けても構わないと思います。というのはキリスト教の歴史において先ほども『ディダケー』から例を挙げた通り、どうしても滴礼とか灌水礼しか授けられなかった場合は、次に状況が整った時、事情が好転した時は、全浸礼を受けるように勧められて 2 回受けているということは、これは別段キリスト教の伝統に反することでもないわけです。勿論滴礼でも灌水礼でも本当に意味が分かって受けたのであれば、それは有効でありますから、無効という考えはありません。もう一回受けなければいけない、浸礼を受け直さなければいけないという必要性は全くありません。ただ受けたいというのであれば、それはオープンに私は受け付けたいということです。バプテスマ・浸礼というものの聖書的な意義を知って、本当に自分が水の中に葬られる、死んで葬られる。そしてそこから上げられてよみがえるということを体感したい。強くそれを望むならば、喜んで私は浸礼を受けたいと思います。灌水礼とか滴礼しか受けていない方にはそうしたいと。で、実際のところ私も同じ体験を持っています。幼い時に私も滴礼を受けています。で、その後浸礼・バプテスマも受けておりますので、自分の体験からもそのことを伝えておきます。

で、もうひとつバプテスマの中でよく問題となるのが、幼児洗礼についてであります。幼児洗礼、子供の時にバプテスマを受けるということです。教会、または親の信仰に基づいて乳児や幼児・児童に授けられる洗礼のことを幼児洗礼、或いは小児洗礼と言います。これはもうカトリックだったら当たり前のことです。生まれた途端にバプテスマを受けます。それによって自動的にカトリック教徒になるわけです。というのは彼らのサクラメントによれば、それを行うことで救われる。行為義認ですからもう乳児の時にカトリックの洗礼を受けたら、もうカトリック教徒になれると。勿論ある程度大きくなってからは改めて自分の意志を持って信仰の表明をする堅信礼というのは後でありますけれども、でももう生まれたての赤ちゃんでも頭に水をかけて洗礼式が行われるわけです。では、プロテスタントはどうなのかということなんですが、ルーテル教会、カルバンの改革派教会、そして聖公会(英国国教会の流れです。)など宗教改革期に成立した、国教化した教派というのは、幼児洗礼も大体行っております。で、日本においてはルーテルとか、改革派、聖公会等ございますけれども、日本キリスト教団でも幼児洗礼を執行する教会と執行しない教会、2 つに分かれます。で、先程私は自分の経験を少し話しましたが、生まれる前から母のお腹の中にいる時から日本キリスト教団には行っていましたけれども、その後 7 歳になってから教会が変わりましてルーテル教会の流れを汲んだ系列の教会に行きまして、そこで私は滴礼を受けました。ほとんど記憶はありません。父親が滴礼を受けたのでそれに伴って私と 3 歳下の弟と一緒に受けたんですけれども、その時の記憶は一切ありません。ただ「前に来なさい。」と

言われて、頭に何かかけられたというそれぐらいの記憶しかありません。で、その後どうなっていくのかは皆さんも知っての通りなのでここでは割愛しますが、非行に暴走していったのであります。でも 17 歳の時にはイエス・キリストを自分の救い主として信じて、本当の回心を経験しました。で、18 歳の時には堅信礼というものをその教会で受けました。幼児洗礼を受けた者は堅信礼を受ける。カトリックにもそれがあると言いましたが、ルーテルの流れでは、ルーテルはもともとカトリックの修道士ですから、いろいろカトリックの伝承も継承している部分があるわけです。堅信礼といっても水を使うわけではありません。公の場で全員の前で改めて自分がイエス・キリストを信じたということを表示するだけであって、水を使った儀式というのはありません。これはカトリックと同じです。幼児洗礼を受けて、一定の年齢に達してから堅信、堅く信じますということを公で表明する。水のバプテスマを受けなすということはありません。で、この堅信礼というのはカトリックだけではなくて、ルーテル、聖公会でも一般的であります。でも、それ以外のプロテスタントでは非常にレアなケースと言っていると思います。バプテスト派のすべてと福音派の内の特にホーリネス系、聖霊派のペンテコステ派の一部は、「聖書の中には幼児洗礼の記述なんかないじゃないか」と。本人の信仰が確認出来ないという理由から、一切認めていません。幼児洗礼は認めないという立場が、バプテスト教会(バプテスト派です。)そして福音派の中の特にホーリネス、ペンテコステ派の一部。ですからプロテスタント中でも一切認めないという教派もあるということです。で、私はちなみにその後アメリカに渡ってカルバリーチャペルというところで学んだわけですが、そこでプールで全浸礼を受けました。ですから私はカルバリーチャペルで全浸礼・バプテスマを受けました。

で、幼児洗礼についてもう少しお話していきたいと思うのですが、これを認めない立場の人たちの理由としては、聖書に子供が洗礼を受けているという記述がないということ以外に、本人の信仰の確認が出来なければ意味がないということなんですけれども、ではどの程度の年齢になったら本人の信仰の意思が確認出来るかという、そこが大きな問題になってくるわけです。私は幼児でも自らの意志を持ってイエス・キリストを信じるその信仰に与る事は可能だと確信しています。例えばチャールズ・ハッドン・スポルジョン、19 世紀世界最大の教会を牧会したそのスポルジョンもこう言っています。「たとえ 7 歳の幼児であっても正しく教えると大人のようにキリストを信じて生まれ変わることができる。」7 歳で、私も 7 歳で幼児洗礼を受けましたが、全然分かっていませんでした。でも、ホロコーストのサバイバーでオランダ人の有名な世界的福音伝道者のコーリー・テンブーンという人は、わずか 5 歳でイエス・キリスト救い主として信じ受け入れました。その時お母さんはこう言ったそうです。「コーリー、今からあなたはとりなし手なのよ」と。とりなしの祈りをするとりなし手なのよと。5 歳の時イエス・キリストを信じてから「これはあなたの務めとなる。」で、周囲に住んでいる人たちのためにとりなしの祈りを始めていったそうです。5 歳の時からもう祈りの奉仕を始めているわけです。また史上最も多くの人に福音を宣べ伝えたビルー・グラハム。彼は 7 歳の時に救われています。他にも幼少期に、7 歳以下でもイエス・キリストを明確に信じたという人たちはたくさんおります。ソウル・サーファーという映画でも主人公であったベサニー・ハミルトンという片腕がサメにもぎとられた少女。彼女も 5 歳の時にイエス・キリストを信じて洗礼を受けていますので、いくらでも私たちはそうした事例を認めることができます。幼児でも自らの意思でイエス・キリストを信じ受け入れ洗礼を受けることは可能だと。この教会にも、もう例を挙げるまでもなく、たくさんの幼児がイエス・キリストを明確に信じて、牧師の私のところに来てそれをわざわざ表明して、親は一切関係なく「私は洗礼を受けたいです。」という表明をしてくれます。ですから、そういった子どもたちが実際に存在するということを皆さんも知っているのも、そういう子たちの受ける幼児洗礼、これは有効だということを知って頂きたいと思います。でも、私が 7 歳時に訳も分からず、父親が洗礼を受けるから滴礼を受けましたというのは有効ではないということ、この違いを知って頂きたいと思います。流れでとか、周りに言われてとか、プレッシャーでとか、親が命令したからとか、それは全部無効だということです。あくまで本人が、幼児であっても本人がイエス・キリストを信じるという信仰の決意表明です。それを公にする時、資格があるということです。

で、参考までに、アナバプテストというグループ。これは日本語では再洗礼派と言います。アナバプテストと呼ばれる宗教改革時代にフルドリッヒ・ツヴィングリという宗教改革者(ツヴィングリの名前も覚えておいて下さい。)の弟子たちから分派した教派があります。彼らは幼児洗礼を否定します。大人の、成人の信仰告白に基づくバプテスマ(成人洗礼と言いますが)、それを認めるというのがこのアナバプテストの教理の特徴の一つです。再洗礼というのは幼児洗礼者に再びバプテスマを授けるということで再洗礼派と言うわけです。幼児洗礼は無効ですから、改めて再度洗礼を受けなければいけない。その流れはメノナイト、アーミッシュ、プリマス・ブレザレン。アナバプテストの流れを汲んだグループです。

で、洗礼を一切行わないプロテスタントの教派も存在します。それはクエーカーというグループです。そして救世軍。日本であれば内村鑑三の始めた無教会派。一切洗礼を行わないという団体があります。内村鑑三自身は教会で洗礼を受けていますから、それは後に、内村以降にそう定められていくということなのですが。クエーカーの入会式とか、或いは救世軍の入隊式には洗礼に準ずるものが行われます。希望すれば他のプロテスタント教派の教会で聖餐式も受けられる場合もあります。もう洗礼とか聖餐式は一切行わない。でも希望すればそれも叶うということもあります。無教会派の集会のメンバーは、洗礼を受けていないので受洗者としてみなされない。聖餐式も他の教会では受けられないというケースがあります。無教会派では礼拝の中心を占めるものは聖書講義、聖書講話と言うんですけれども、その前後に讃美歌を歌って、祈りや黙祷をするわけです。プロテスタントの礼拝形式を簡素化した形。この教会はまさにそういう雰囲気があると思います。無教会派のような雰囲気があると思います。非常にシンプルです。で、通常はバプテスマとか聖餐式は、儀式といった類は、行わないのが無教会派の特徴でもあります。だからといって洗礼に反対、聖餐に反対という立場ではありません。その意味においては、無教会主義というのは「反教会主義」ではないということ。これを誤解しないで下さい。また、バプテスト教会、バプテスト派と呼ばれるグループでは、全浸礼によらない洗礼の形態(滴礼とか灌水礼)はバプテスマとは一切認めない、という立場を明確にしています。同時に他教派・他教会(聖公会とか、ルーテル教会とか、或いは改革派教会とか、長老派とか、メソジストとか、いろいろな教派・教団があります。会衆派とか)そうしたところで洗礼を受けていても、バプテストのグループで洗礼を受けていなければ、他での洗礼・バプテストは一切認めない。もしバプテスト教会に転入したければ、転会したければ改めてバプテスト教会が施す浸礼を受けなければ認めないと。もし、そのバプテスト教会のスタイルの洗礼を受けなければ、教会員としては認められません。聖餐式も受けられなければ、教会員ではないので奉仕も出来ないということです。でも、教会に出入りは出来ます。でも、出入り出来るお客さんということになってしまうということです。何年通っていても同じです。

私自身はバプテスマの形態・方式、そのやり方には一切こだわりはありません。ただ原則として全浸礼が望ましいというのは、これを変えない姿勢であります。でも、それを重視しているのではなくて、重視しているのは「イエス・キリストがバプテスマを制定された。これは命令である。これはイエスの模範である。」という事実と、その意味、バプテスマの聖書的な意味・目的、ここを重視しています。これさえ押さえていれば、形式・形態・やり方には一切こだわらないという意味であります。で、これは洗礼式も聖餐式も体で、五感で体感できる特別な祝典であると私は考えています。ですからクリスチャンとしてこれらに与らないというのは、なんとももったいないことだと思いますし、残念極まりないことだと思います。場合によっては、命令に反するという事にもなれば、これは大変な損失ということになりかねません。ですからよく考えて頂きたいということです。本来バプテスマを受ける必要のなかった罪のないイエス・キリストでさえもわざわざバプテスマのヨハネから、自分よりも遥かに身分の低い者です。バプテスマのヨハネは、イエス・キリストの靴のひもを解く値打ちもない、奴隷以下の者だったにもかかわらず、その者からわざわざ洗礼を受けたんです。バプテスマを受けたわけです。で、それには勿論意味があった、目的があったわけです。ですから私たちはこれを軽視するとか、無視することは絶対にやってはいけないことです。「これはただの儀式だから。意味のないこと

だから。」そうではなくて私たちはもう単純にイエス・キリストの命令とその模範に従う弟子であるということです。

で、最後にもう一度強調したいことがあります。これが最大のバプテスマに関する誤解という点ですけれども、バプテスマを受けることによって救われる、洗礼を受けることによって救われるという考え。これが最大の誤解です。これは異端の教えと言っていいと思います。これはもう救いにかかわる最重要事項ですから、念のために最後に今一度確認だけをしておきたいと思います。

洗礼によって新しく生まれる、新生する、或いは洗礼によって再生する、洗礼による救い。これは、英語では”Baptismal regeneration”と言うんですけれども、洗礼によって新生するという教理です、思想です。これを支持するのは、ローマ・カトリック教会です。でも、プロテスタント中にも残念なことにルーテル教会、イングランド国教会（英国国教会、聖公会のことです。）、そしてキリスト教系異端のモルモン教。これも洗礼を受けなければ救われないと説きます。モルモン教が異端というならば、カトリックも、ルーテルも、イングランド国教会もその他いろいろレステーション運動と呼ばれるグループもあるんですが、全部異端ということになります。というのは、人は洗礼を受けなければ救われ、行い無しには救われないとすれば、それはもう信仰義認の教えではないからです。それはもう他の宗教、キリスト教ではない。非聖書的・反聖書的ということになれば、これはもう異端と扱われても致し方のないものとなります。これを言い切るという事は、大変勇気のいることです。「カトリックは異端です。ルーテル教会は異端です。イングランド国教会・聖公会は異端です。」モルモン教と同じように爆弾発言です。でも誤解しないで下さい。カトリックの中にもイエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れたことによって救われている、所謂ボーン・アゲーン・クリスチャンはいます。ルーテル教会にもイングランド国教会にも。でも、モルモン教にはいません。モルモン教は自分たちのことを「私たちはボーン・アゲーン・クリスチャンです。」と公言してはばからないです。で、私はその都度「違いますよ。」と何回も否定して議論したこともありますけれども、モルモン教以外はカトリックであろうと、ルーテルだろうと、イングランド国教会だろうと、その中には聖書的に信仰義認の教理をちゃんと受け止めて、その上でバプテスマを受けて救われているという人がいます。ですから、それらすべてのグループが異端だと言ってるのではありません。ただし、これは私は妥協するつもりはありませんので、ハッキリ言っておきますけれども、もし彼らがこれをいつまでも自分たちの公的な立場として、自分たちの正式な教理として掲げ続けるようであれば、そうした教会に行くことを私は勧めることは出来ないということです。

で、繰り返すということを言いましたが、ルカ 23:43 で、イエス・キリストが十字架上で、彼と共に磔にされた強盗の 1 人に対して「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」もし、洗礼を受けなければパラダイスに行けないとすれば、イエスは嘘を言ったことになります。ですから、この洗礼による新生、洗礼による再生、洗礼による救い、”Baptismal regeneration”という教えを説くとするならば、私は「イエス・キリストは嘘つき」ということになってしまう、これは恐ろしい教理だと。聖書に書かれていることは偽りであるということになってしまうので、そうした意味から私は、強く、何と言われようと、私の主が嘘つき呼ばわりされるのには我慢ならないので、これを強調して伝えていくのであります。私は何と思われても構いませんが、イエス・キリストを嘘つき呼ばわりされるわけにはいかないということでお話しております。

で、またプリンストン神学のチャールズ・ホッジという有名な世界を代表する神学者はこう言っています。「洗礼を受けることを命ぜられていることは確かである。しかし此等は信仰によって服従する義務であって、救いの手段ではない。洗礼によって人は神の子とされ天国の世嗣となる、というようなことを教える者は非キリストである。」と。キリストとは違ふと、キリストあらざるものだと。洗礼によって救われるというのは、もうキリストあらざるものだと、チャールズ・ホッジという有名な神学者がそう言っています。ですから、皆さんは各教派で洗礼というものはどのように受け止められているのか、どのように理解されているのかということも、ある程度歴史も踏まえて、聖書の当然教えをベースにして

捉えて頂きたいと思います。

で、今このことを初めて聞いたと言う人があるとしたら、改めて私はイエス・キリストを信じて洗礼を受けたいと言う際に、3つのポイントを確認して頂きたいと私は勧めます。まず第一のポイントは、天地を創造された唯一真の生ける神を信じるという事。第二のポイントは、その神の前で自分が罪人であることを認めるという事。第三のポイントは、その罪を赦す救い主として神のひとり子イエス・キリストが十字架に掛かって死から復活されたことを信じ、心の中に迎え入れるという事。この3点、3つともクリアするならば、時間を置かずに遠慮せずにキリスト教会の牧師に申し出て頂きたいと思います。きっと喜んで迎えていただければ幸いです。

ただし、教団教派によってはもっと細かい厳しい審査や、複数回の面談を求められたり、バプテスマのための学び会(準備会とよく言われます。)といったものや、キリスト信仰に至るまでの経緯をまとめた証し文の作成(何ページにも渡るものです。)を書かされます。そして教会の長老、役員会などの(最終的には牧師の)承認がなければ、たやすくバプテスマを受けられないというところがあります。で、このために数週間、数ヶ月、長い人は何年もバプテスマを受けさせてもらえない。私は、何年もバプテスマを受けさせてもらえなかったという人を知っています。その人は仕事の関係でなかなか学び会に定期的に参加できなかったのです。でも、学び会をちゃんと終了しない限りはバプテスマを受けられないと。で、その人は文章を書くのがあまり得意ではなかったもので、作文が苦手だったのです。だから何回も何回も書き直しを命じられました。早く洗礼を受けたいのにと、とてもがっかりしていました。で、結局その人は洗礼を受けることは出来たんです。でも、もうその時点ではすっかり興ざめしてしまって、すっかり失望してしまって、生まれただの信仰は衰弱の一途をたどり、結局は教会生活は長くは続きませんでした。

洗礼はゴールではなくて、スタートであります。生まれただの信仰を育むところが教会というところなんです。ですから重要な事は、誰から洗礼を受けたとか、ではありません。どこで受けたとか、関係ありません。信仰生活を継続することが、バプテスマの最大の目的であります。パウロもコリント人への手紙の中で、誰から洗礼を受けたかという事は重要ではないということも言っております。ヨルダン川で洗礼を受けるのが最高だとか、そんな事はありません。私も一瞬そう思って、チャック・スミスとイスラエルに行った時には、ヨルダン川でチャック・スミスから思わず洗礼を受けてもらおうと群衆に紛れ込んで密かに計画したんですけれども、やはり私の良心がそれをとがめて、「それは違うだろう。」と聖霊が私に囁いて、断念しました。誰から洗礼を授かるとか、関係ないです。私に洗礼を授けたのは、カルバリー・チャペルのバイブル・カレッジの同じ学生です。学生から私は洗礼を受けました。学生と言っても、元学生なんですけれども、一緒に学んで先に卒業しただけの先輩だったわけです。でも、誰からというのは関係ないわけです。もうその人の名前すら私は忘れましたが。でも、イエス・キリストの名によって授かるというのは、イエスから洗礼を受けるということを意味するわけです。イエスがその人の中に働いて、あたかも私はイエスから直接洗礼を受けるかのような体験をしたわけです。いつかその人に会いたいと思いますけれども。

ですから教会においては、バプテスマを受けた人たちをフォローアップしながら、その生まれただの信仰を養っていく。そのスタートを切るためには、このバプテスマが最高のセレモニーと言っていいと思います。お祝いすべきセレモニーです。まあ、結婚という事は、紙だけでも、婚姻届を出せば成立するわけです。でも、敢えて皆さんの前で、公で「自分たちは結婚しました。」ということを体現する結婚式。これを通して大勢の人から認めてもらって、大勢の人から祝福を戴く。ですから「密かにイエス・キリストを私は心で信じています。でも、バプテスマは受けません。」特別な事情がない限り、それはあり得ないことです。結婚式が挙げられるのに、自分たちは婚姻届だけで済ませる。何かおかしいです。何か不健全なものをそこに感じます。ですから後ろめたさもないです。自分はこの喜びを1人でも大勢の人に知ってもらいたい。そして1人でも大勢の人に共に祝ってもらいたい。それが信仰者としては自然な

ことであります。健全なことです。その健全な信仰生活の歩みが、バプテスマをもってスタートするわけですから、教会でもそのように健全な信仰生活を継続できるように、成長出来るように、まずその信仰というものは御言葉によって養われていきます。ローマ 10:17 を皆さんも知っての通りです。『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』御言葉を聞いて、イエス・キリストを信じて、バプテスマを受けたわけですから、御言葉をしっかりと体系的にバランスよく健全に教えてくれる教会に繋がって、そこに通い続けることが肝要だということも最後に押さえておいて頂きたいと思います。

洗礼を受けたらゴールではないんです。スタートですから。では、どういう教会で信仰生活を続けていったら良いのか。スタートしたのであれば、ちゃんと信仰の養いが受けられる、御言葉がしっかり語られる教会で教会生活を送るのが望ましいわけです。そのためには、場合によっては、自分が洗礼を受けた、受洗した母教会を変える必要も、鞍替えする必要もあると思います。日本人の妙な義理立ては、ここには一切必要ないと私は明言したいと思います。日本人は「どうしてもお世話になった教会だから。散々牧師先生には親身になって相談にも乗ってもらって、そして教会員の方々にも一生懸命勧めて頂き、サポートして頂いて、そして晴れて洗礼を受けられたのですから、私には義理があります。とてもそんな教会を後に出来ません。」未練があるわけです。勿論執着心もあるわけです。でも全部それは不要なことです。義理だとか、未練だとか、執着心、全部不要です。というのは、天国には教団教派なんか無いからです。地上でこだわって、天国にないものをこだわっても。天国には1つの教会しかないんです。真の教会。地上の所属教会は、天国まで引き継がれるのではないのです。もし天国まで引き継がれるのであれば、私たちはこの地上での教会、どこに属するのか、非常にこだわらないといけないと思います。でも天国ではもう無いわけです。で、地上での時間というのは限られています。私たちはいつか天国に行く者です。でも、その天国に行くために備える時間というのが、この地上で与えられているわけです。その備える時間でどこまで信仰を高めていくことができるのか、どこまで信仰を育て成熟を目指していくかどうかが、私たちに問われていることです。そのために教会選びをしなければ、この地上での生涯はまったく無駄になります。自分の人間的な、個人的な、日本人的な義理だとか、人情だとか、執着心、未練でその時間を無駄にするのは、何とも言えない、これはもったいないことだと思います。ですから、洗礼を受けて本当にそこで良いスタートを切ったのであれば、そのまま良いレースを、信仰のレースを歩み続けて、走り続けて頂きたいと私は願っていますので、その上で御言葉をしっかりと教えてくれる教会というのが不可欠だということです。仮にそこが日本最大のプロテスタントの教団教派であっても、たとえそれが世界で最も伝統的な教団教派であったとしても、たとえそこが世界的に有名な教会、たとえそこがお世話になっている人の多く集う教会だったとしてもです。天国に備えるための時間は、刻一刻ともう限られていますから、そこでただ義理人情だけで何となく教会に通っているとか、全然信仰の養いを御言葉を通して受けられない。それを良しとして、ただ決まった時間に椅子に座って、プログラムを卒なくこなして、それで信仰生活が10年、20年、30年、40年とただ過ぎていけば、それほどの損失はないと、私はハッキリそう思います。本当にもったいないと思います。ですから、教会選びの最大のポイントというのは、御言葉を体系的に、体系的にというのは聖書 66 巻をちゃんと教えてくれる教会です。聖書は勿論使います、教会ですから。聖書は勿論教えます。教会ですから。でも聖書 66 巻をくまなく教えている教会でなければ、私はそこには行くべきではないと思います。そこまでハッキリ言うのは、皆さんには無駄な時間を過ごして頂きたいと思っているからです。もったいないと思います。「そんな教会はありませんよ。」あります、探してみれば。「いや、それはそうなんですけれども、でもそこまで行くのに車で2時間、3時間かかるんです。」行ったらいいと思います。その車で2時間、3時間の時間がどれほどの価値ある時間なのか、決して無駄な時間ではないということです。でも、近場で聖書を教えていない教会に2時間、3時間居ても、全くの時間の無駄だと私はハッキリそう伝えておきたいと思います。まあ、そういう教会を非難したりとか、否定するつもりはさらさらありません。でも、事実を言っているんです。『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるの

です。』このことが私の信仰には絶対不可欠です。そして使徒の働き の 20 章にも書かれている通り、使徒パウロは「神のご計画の全体を、余すところなく伝えたから責任は無い。」と、そう言い切っています。“神のご計画の全体”とは、聖書 66 巻のことを意味しているわけです。この責任を果たすのが、牧会者の務めです。この責任を果たさないのであれば、責任は勿論牧師に問われますし、そのような教会に繋がっている者にも責任が問われるわけです。「あなたは、聖書 66 巻をちゃんと学びましたか。」と、「地上に置かれているその期間の中で、聖書 66 巻をちゃんと学びましたか。」とあなたが問われるんです。牧師も問われますけれども、クリスチャン一人ひとりもそれが問われるわけです。「いや、私はそのような教会には属してなかったんです。」そんな事は言い訳にはなりません。それはあなたがそう決めたからです。あなたがそこにいつまでも所属することを決めたからです。でも、私たちは学ぶ権利もありますし、学ぶ特権もありますけれども、学ぶ責任もあるということです。そうでなければ、私たちの信仰はいつまでも成長しない、健全化されないわけです。どこか歪んでいる、どこか偏っている。なぜ不健康なのか、霊的に。それは、あなたが聖書 66 巻を体系的に学んでいないからです。アンバランスな学びしかしていないから。ろくに御言葉を聞いていないから。だから衰弱するわけです。だから病的になるわけです。だから非聖書的な教えにすぐに飛びついて、惑わされて、振り回されてしまうんです。

エペソ 4 章に『¹¹ こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。¹² それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、¹³ ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。¹⁴ それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたえおそれたりすることがなく、¹⁵ むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。¹⁶ キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。』私たちは成長する者でなければいけません。10 年も、20 年も、30 年も、40 年も教会に通っているのに、まだ変わらない。まだ「それでもクリスチャンか。」と言われ続ける。それではいけないのです。

ですから、今まで語られてきたこと、洗礼の重要性・必要性です。そして、もしそれらを知らずに、また先に挙げた 3 つのポイントを(天地を創造された唯一真の生ける神を信じる事。そして、その神の前で自分が罪人であることを認める事。そして、その罪を赦す救い主として神のひとり子イエス・キリストが十字架に掛かって死から復活されたことを信じて、イエスを心の中に迎え入れるという事。)、このことを真実に心から信じたのではなくて、ただ頭で知っているということだけでバプテスマ・洗礼を受けてしまった人。周囲からのプレッシャーで「あなたもそろそろ洗礼を受ける時期が来ていますよ。受けませんか。」教会関係者に世話になったので、切りを感じて、思わず流れで、思わず雰囲気で、思わずプッシュされて、洗礼を受けてしまった人たち。或いは、好きになった人、その人がクリスチャンだったから。結婚するためには洗礼を受けなければいけない、ということで受洗した人。その受洗が、今お話ししてきたすべてのことに基づいて洗礼を受けたものでなかったならば、つまり信仰に基づく洗礼・バプテスマではなかったならば、それはただの水浴びだったということです。その洗礼は有効ではない。無効だということです。人の前では有効とされたかもしれませんが、少なくとも神の前では無効だということです。意味のない水浴びだったということです。

それを私はジャッジ出来ません。ジャッジできるのは神だけです。神はご存知です。あなたと神との関係の中で、そのことを今考えて頂きたいと思います。もし、聖霊なる神があなたの心の中で「やっぱりあの時は、私は何も分かっていなかった。」と、ただの水浴びだったというふうに示されたら、改めて水のバプテスマを受ける事を勧めたいと思います。でも、それは例え滴礼であろうと、灌水礼であろうと、心底から自分はイエス・キリストを主として信じ受け入れて、その時の信仰は偽りのないものだったと確信があるならば、それは有効です。形式とか形態は関係ありませ

ん。勿論全て分かった上で洗礼を受けるという人は一人もありませんから心配しないで下さい。ただ、今挙げた 3 つのポイント、これを外して洗礼を受けて有効だということは絶対ないということです。「後からバプテスマの意味とか、意義とか、象徴的なこととか、後から聖書を読んでいて理解出来るようになりました。」それは構いません。スタートを切ったわけですから。でも、資格者としての 3 つのポイント、これを踏まえていなければ、水のバプテスマはただの水浴びだったという事は、否定出来ない事実だと思います。ですから、どこかで引っかかっているものがある。心の中に何か思い残しがある。悔やんでいるものがある。本当にあれで良かったのか。確信が持てない。不安だとか。まあ、そういう人は、思い切って洗礼を受け直した方が、私は良いと考えています。改めて公の場で信仰告白をして、洗礼を受け直した方が良いと。そんな思いを引きずるようだったら、思い切って過去はもう振り返らず、「あの時皆さんにも集まってもらって洗礼を受けたけれども、でもやっぱり今更ながら。」と思わないで頂いて、恥ずかしいと思わないで頂いて、神との関係の中で正しいと思うことを率先して実行して頂きたいと思います。

まあ、再洗礼ということを認めない教団教派もありますけれども、MGF においては、それは認めております。私自身がその体験者でもあるからです。ただし、それは 2 回までとしております。特に私が授けた洗礼は、絶対にもう 3 回は無いということを知って下さい。3 回目はもうないと思って下さい。本来は 1 度でいいんです。1 度受ければ十分です。2 回も 3 回も受けるものではありません。でも、1 度目がただの水浴びだった場合は、2 回目というのは有効だと思います。それは有益だとも思います。ですから、2 回目という形で改めて受けたいという方は、よくよく慎重に祈った上で、主からの促しとか、主からの確信が来ないうちは、安易には受けないで下さい。3 回目は無いですから。1 回目の時は安易に受けたかもしれません。あまり考えていなかったかもしれません。ろくに祈ってもなかったかもしれません。でも、2 回目はそうではないということを、1 回目のようではないということを知って頂いて、もう次は無いという気持ちで受けて頂きたいと思います。

で、今年も洗礼式を行えることを心から願っていますけれども、一度受けた人に 2 回目の洗礼を受ける、それも喜びなんですけれども、できたら一度も洗礼を受けたことのない方に洗礼を授けたいというのが、牧師としての願いでもあります。ですから、私たちは大宣教命令を受けて、全世界に出て行って、すべての造られた者にイエス・キリストの福音を宣べ伝えて、そして彼らが洗礼を受けるということを、バプテスマを受けるということを、そのことを皆さんも願って、目指して、これからまた主によって派遣されて頂きたいと思います。牧師でなければ出来ないことではありません。もう病床において本当にもう末期の水のようにして、もう最期。もう牧師が来るには時間がかかってとても無理だと。そうしたらその場であなたが洗礼を授けて下さい。水がそこにはないと思っても、水滴でもいいんです。

ですから、是非バプテスマというものを正しく認識して頂いた上で受け直す必要がある方は、躊躇なく、遠慮なく、勇気を持って。それによってさらにあなたと神との関係が豊かなものになり、正しいものになって、そして本当の意味でクリスチャンとして新しいスタートをこれで切れる、というふうに思われるのであれば、是非そうして下さい。ただし、2 回目まで。3 回目は無いという、腹をくくった決意を覚悟して頂きたいと思います。

そして何度も繰り返すようではありますが、今年も私は主に期待したいと思います。皆さんが 1 人でも多くの人にイエス・キリストの福音を宣べ伝えて、そして洗礼にまで、バプテスマにまで導いて頂きたいと思います。でも、それがゴールではありません。それがスタートですから、ちゃんと聖書を教えている、体系的に聖書 66 巻を組織的に教えている、そういう教会にも繋げて頂きたい。この教会が唯一の教会ではありませんから、勘違いしないで下さい。そういう教会は他にもきっとありますから、遠方にいる方々、県外に住んでいる方々も、皆さんの知っている方々、是非そうした教会に繋がれるように。神様が望んでいるのは私たちの信仰の成長です。バプテスマを受けて終わりという話ではありません。それがゴールじゃなくて、むしろスタートですから、そこからは肝心なんです。そこが肝要なポイントです。折角洗礼を受けたのであれば、ちゃんと信仰の成長が望めるような教会に属さなければ意味がないという

ことです。「良かった、洗礼を受けて。パチパチパチ。」ではないのです。そこからが大事です。生まれたての信仰が、終わってみたらどうなっているのか。主の前に立った時に、どうなっているのか。それはただの水浴びで終わってしまったのか、それともその水浴びは、本当にイエス・キリストとの一体化を意味し、そこから始まった生涯はイエスと一体化する生涯であった。この人の生き様はまさにキリストのそれと同じだった。それが、私たちが目指していく歩みであります。そのためには御言葉の学び、教えというものが必要不可欠、絶対に欠かせないものだということを強調して今日は終わりたいと思います。